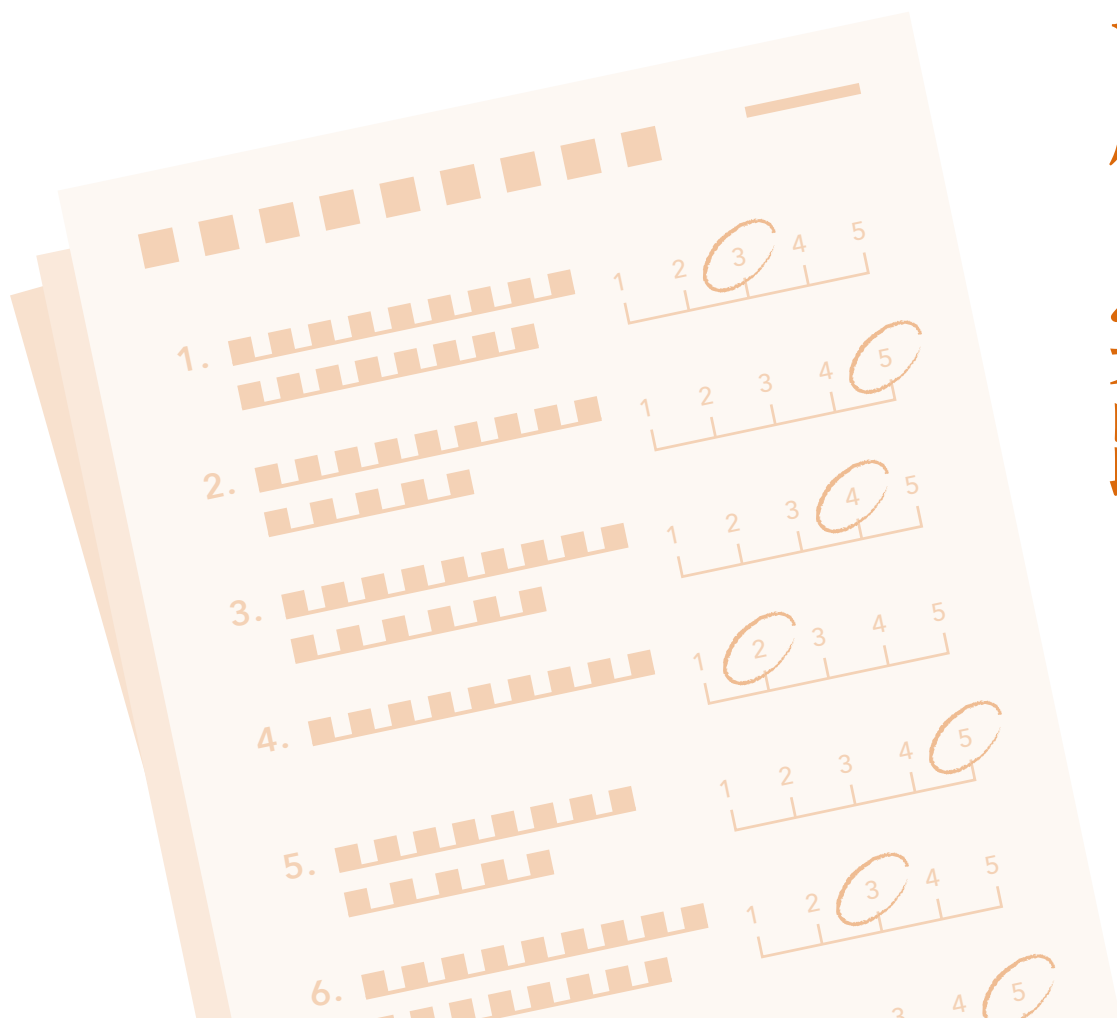


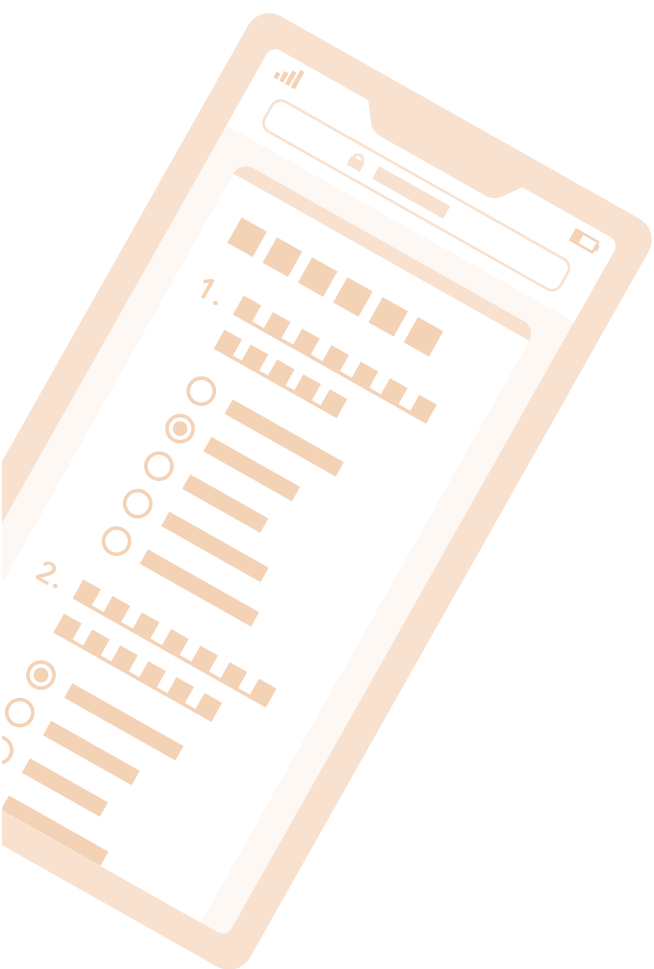
学生の授業評価—活用と実践—

1991年の大学設置基準大綱化以降、各大学に自主的な教育の改善が求められるようになり、自己点検・評価に関する委員会の設置や授業評価の導入が進んできた。大綱化から30年を迎える現在、学生アンケートに代表される授業評価は、授業運営や用いる教材について学生の評価を引き出し、教育カリキュラムの改善につなげるという当初の目的に加え、学生の主体的な学びをどう作るかといった視点も加味され、FD(ファカルティ・ディベロップメント)の一環として続けられている。

2021年2月に公表された中央教育審議会大学分科会の「教育と研究を両輪とする高等教育の在り方について」教育研究機能の高度化を支える教職員と組織マネジ



メント（審議まとめ）」でも、FD等の実施においては「教員のみならず、教育研究活動を支える事務職員等の構成員や、特に、教員から直接に教授あるいは研究指導を受ける学生の視点を取り入れることが望まれる」との記載がある。こうした背景からも、本企画では、学生の授業評価をどのように生かすのか、学生とともにどのように授業を作っていくのか、学生による授業評価の実践事例や課題、実施方法の改善といった情報を共有し、授業評価のいまを知るとともに、グッドプラクティスや課題を共有することで、今後の各大学の授業およびカリキュラム改善やFD活動に生かす契機としたい。



CONTENTS

「学生による授業評価」に基づく授業改善

三浦 英俊 南山大学理工学部教授

大学における良い授業って何だろう？

—学生の授業評価アンケートから
授業デザインを考える—

岩瀬 峰代 島根大学教育・学生支援機構

大学教育センター准教授

「学生目線」を授業改善の資源に

新原 将義 帝京大学

高等教育開発センター講師

学生委員による学生提案科目目の実施

岩崎 千晶 関西大学教育推進部准教授

「学生による授業評価」に 基づく授業改善

三浦 英俊

南山大学理工学部教授

1 学生による授業評価の概要

南山大学では、1997年度から全学的な授業評価に取り組み、今日に至っている。2017年度のクォーター制導入以降、2019年度までは専任・非常勤を問わず1教員当たり年に4つの授業について「学生による授業評価」を実施してきた。

学生は、Web上に設けられたアンケートに回答する形式で授業評価を行う。教員は、評価項目ごとの数値結果や自由記述欄の内容を基に、「自己点検・評価報告書」を提出する。報告書は、①開講当初に設定していた目標と到達の程度について、②数値データおよび自由記

述等を踏まえての担当科目に関する総合的な自己点検・評価、③次クォーター・学期以降に向けての改善点、今後の抱負、方針などの3点について記述が求められる。教員から提出された全ての報告書は、まとめ冊子として束ねられる。

「表1」に2020年度の設問項目一覧を示す。これらの設問はオンライン授業と対面授業の併用に対応したものとなっている。設問16、17の自由記述欄の記述から、授業の環境や大学全体に関わる内容を取り出し、事務部門で内容共有の上、改善計画を立てるとともに、学生への回答も行う。

本学ではここ数年来、「主体的に学生が学ぶことができる授業を行うために」に焦点を当てて授業評価を行っており、学生からの積極的な質問や予習を促すシラバスの書き方、授業の進め方などについて、授業評価の設問項目を組み立ててきた。「表1」の設問項目のうち、5と6がこれに対応する。学生はシラバスに記載された到達目標を理解して受講できたのか、学習意欲を持って受講できたのかなどが問われ、学生の授業に臨む姿勢を正しものへ促す設問となっている。

内容	項目番号	設問項目
授業への参加について (選択式)	1	この授業を履修する前、あなたは授業の内容について興味を持っていましたか。
	2	受講に際して、予習や復習を含め、主体的に授業に参加し、内容を理解しようとする努力をしましたか。
授業全体について (選択式)	3	オンラインで受講した場合、事前に予告された開始時間は守られていましたか。対面で受講した場合、授業の開始と終了の時間は守られていましたか。
	4	毎回の授業の構成や進行速度は適切なものでしたか。
	5	この授業の到達目標を理解することができましたか。
	6	あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか。
	7	担当教員の授業に取り組む姿勢に誠実さ、真剣さを感じることができましたか。
授業運営について (選択式)	8	授業中に、教員の声や音声機器の音はよく聞き取れましたか。オンラインで受講した場合でネットワーク環境が不安定だった場合は「どちらとも言えない」を選択してください。
	9	教員は学生の理解度に配慮し、また、教科書、配布資料、視聴覚教材、課題、実技などを効果的に使って適切に授業を進めましたか。
	10	授業の妨げになる行為に対して、適切な対処がされてきましたか。
	11	学生の学習意欲を引き出し、積極的な授業参加や自主的な学習を促すための、適切な指導や情報提供はありましたか。
	12	質問や相談の機会が、十分に設けられていましたか、あるいは、課題、実習等に対する事前・事後指導は十分でしたか。
全体的な評価 (選択式)	13	この授業を通して、新しい知識(あるいは、技術や能力)を得たり、理解が深まったと感じますか。
	14	全体として、あなたはこの授業に満足しましたか。
授業や評価に関する感想など (自由記述)	15	この授業の良かった点、評価できることは何ですか。
	16	授業を受講して改善したほうがよいと感じた点や困ったことがあればできるだけ具体的に書いてください。
	17	オンラインで受講した場合、授業環境(インターネット接続、資料の見やすさなど)についてコメントがあれば書いてください。対面で受講した場合は回答不要です。

[表1] 授業評価の設問項目(2020年度)

なお年4回の授業評価は、教員にとって、また回答する学生にとっても少々頻度が高過ぎるのではないかという指摘があり、2020年度からは、各クォーターで実施するもの(年4回)、1教員当たり年に2つの授業の実施に変更し、教員・学生の負担も軽減されている。

2016年度以前のマークシート方式よりも回答率は2016年度以前より高くなっている。回答率は50%前後であり、

2 設問項目の回答率と平均点の推移

授業評価は、無記名、強制力なし、授業期間中(定期試験前)で行われている。回答率は50%前後であり、

低下した。Web入力の方が回答は容易であるはずだが、マークシート方式時は授業中に回答時間を設けていたのに対してWeb入力となつて授業時間外でも回答できるため、かえって回答率が下がってしまったようだ。教員への授業評価の目的の説明や実施時期についての周知、あるいは学生への回答を促す案内の掲載など、さまざまな取り組みをしているが、なかなか回答率が上がらないのは頭の痛いところである。

大人数の授業よりも少人数の授業の方が回答率は高く、平均点も高い。これは他の大学でも同様ではないだろうか。

評価点数は1から5までで、5が最も良い評価である。項目の全学の平均点は全て4点以上となっている。これまで項目2「受講に際して、予習や復習を含め、主体的に授業に参加し、内容を理解しようとする努力をしましたか」や項目6「あなたはこの授業の到達目標に向けて力がついてきていると思いますか」は4点未満であったが、2019年度より4点以上を達成して現在も継続中である。学生の主体的な学びを目指す授業が増えてきたためと理解している。他の項目も年々平均点は

上昇しているが、「主体的な学び」の先に掲げるべき目標として、どのようなものが適切なのか、そろそろ授業評価の目標の見直しや項目の見直しが必要な時期に来ていることを示しているのかもしれない。

今後は授業レベルの改善だけでなく、カリキュラムレベルの改善にどう取り組んでいくかという目標のために、特に学位授与方針によって求められている学習成果を適切かつ多角的に把握・評価する方法を確立することを課題として取り組んでいきたい。

3 自己点検・評価報告書

自己点検・評価報告書は、授業評価を行った授業ごとに提出される。授業評価によって教員は自身の授業をより良いものへと改善していくために役立つ情報を得て、次年度以降の授業改善を計画し実行する。自己点検・評価報告書は他の教員のものも閲覧し、参考にすることができる。効果的な取り組みや失敗談なども書かれており、なかなか興味深い。筆者の「シミュレーション」という授業についても、授業評価を基に改善に取り組んでお

り、5年前の授業とはかなり異なるものとなっている。冗長な説明を整理し、難しい内容を丁寧に説明することができるようになった。特に演習課題は、簡単過ぎず難し過ぎず意欲的に取り組ませるための内容を目指して、年々バージョンアップをしているところである。

教員が提出した自己点検・評価報告書の内容と評価点数は、副学長はじめ学部長などからなる内部質保証委員会で議論されて、授業の事後評価のためのデータとなる。そして、学部ごとの問題点の把握や全学の授業改善方針の立案に使用される。

おわりに

これまで述べてきた本学の取り組みについては、概要から自己点検・評価報告書まで全て、南山大学Webサイト「教育・研究支援事務室—授業評価」※に掲載されている。参考になれば幸いである。

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大のため第1クォーターの授業評価は中止せざるを得なかったが、第2クォーターから全オンライン授業下での授業評価

を行い、第3クォーター以降は対面との併用授業も始まった。授業評価の点数の平均点は、1年前と比較してむしろ上昇した。新型コロナウイルス感染拡大の影響下で、事務部門や非常勤教員も含めて全学でオンライン授業の体制を急いで整え、授業を行う教員は基礎から応用、座学から実習までさまざまな内容・形態の授業の準備に明け暮れた。むしろオンラインでは不自由なことも多くあるのだが、その中で学生からは一定の評価を得ることができたと胸をなで下ろしているところである。定期試験の実施などオンライン授業にはさまざまな課題があるが、この機会を利用してオンライン授業の質の向上に向けて努力したい。

※南山大学Webサイト

「教育・研究支援事務室—授業評価」

<https://office.nanzan-u.ac.jp/kyoken/jugyou/>

大学における良い授業って

何だろうか？

—学生の授業評価アンケートから
授業デザインを考える—

岩瀬 峰代

島根大学教育・学生支援機構
大学教育センター准教授

はじめに

どんな授業が良い授業なのか、学習目標、評価方法、教授方法それぞれのどこにポイントを置き、どのようにデザインすればよいかを理解した上で実践することは、教員にとって重要である。

学生の「学び」は、教員の「教える」という一方向的な教授方法では成り立たないということが言われてきており、学生が学びたいという意味と教員の学んでもらいたいという思いを結び付ける重要性は「新たな未来を築くための大

学教育の質的転換に向けて、生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（答申）中央教育審議会2012」においても示されている。

そこで、島根大学（以下、本学）では、全教科（集中講義を除く）で実施している授業評価アンケートの結果と授業環境や教授方法との関係を示しながら、授業デザインを考えるワークショップを実施したので報告する。

「授業デザインワークショップ」は2012年度より本学が主催し、山陰地区FD連絡協議会共催の事業として、当該機関に着任して1〜2年となる教員および希望する教員を対象に実施してきている。このワークショップの目的は、授業を担当するに当たって必要となる基礎的な知識やスキルを学ぶことにある。

「授業を担当するに当たって必要となる基礎的な知識やスキル」については、学生の深い学びに結び付く最新の教授方法を理解しながら常にアップデートしたものを提供する必要がある。そこで、学生の深い学びに結び付く教授方法の意義を本学の教学データを使って分析し、その結果を基礎的な知識やスキルを提示することができれば、受講者にも納得して使ってもらえると考えた。

1 アクティブラーニングの実施状況調査

「主体的に考え、どんな状況にも対応できる人材」育成に、学生が主体的に問題を発見し、解を見いだしていくアクティブラーニング(以下、AL)等が注目されており、本学においても全学的にALの導入に取り組んでいる。2014年に山地弘起氏らが提案しているALのタイプ「知識の定着・確認志向(思考の活性化)」「表現志向(表現技能の充実)」「応用志向(知識・スキルの活用)」「知識の活用・創造志向(総合的活動)」の4つの区分に具体的な事例を加えた表「表1」を提示し、教員にシラバス作成時にチェックしてもらうことで、これら4つのタイプのうちどのようなALをどの程度実施しているのかを毎年度調査し、AL科目実施率のデータとしている(学務情報システムで管理)。

なお、本学では2つ以上を授業中に実施し、かつ各タイプに相応した方法の実施頻度をポイントに換算(授業回数数の50%超…3、授業回数数の15%～50%…2、授業回数数の5%～15%…1)して、合計4ポイント以上(最高は12ポイント)の科目をAL(科目)として定義している。

ALタイプ	方法
知識の定着・確認志向 (思考の活性化)	振り返りシート(ミニッツペーパー)
	授業外学習の促進(予習・宿題)
	実験(検証実験等)、調査(ウェブ検索、図書検索など)
	質疑応答(双方向性のある活動。コメント・シートなど)
表現志向 (表現技能の充実)	練習課題、ミニテスト・クリッカー(知識の確認や意見の収集をする)
	プレゼンテーション(学生による発表活動など)
	ディベート(異なる立場に分かれた議論演習など)
応用志向 (知識・スキルの活用)	ライティング(論理的な思考を育成する。文章課題の添削など)
	問題基盤型学習(Problem-Based Learning)(テーマ設定型議論など)
	専門演習(ゼミ、抄読会、輪読会、ジャーナルクラブなど)
	シミュレーション(予測、模擬実験、模擬訓練、ゲーム型ワークなど)
知識の活用・創造志向 (総合的活動)	ケースメソッド(問題解決能力等の向上を図るワークなど)
	プロジェクト型学習(Project-Based Learning)(卒業研究含む)
	フィールドワーク(現地での実態に即した調査・研究など)
	創作活動(詩、小説、作曲、ゲーム、ダンス創作など)

[表1]アクティブラーニングの4タイプ

2 授業評価アンケートで学びを検出

授業評価アンケートは、授業の状況や全体像の傾向を見ることを通して課題やその解決策を探ることが目的とされている。しかし、本学では導入された2004年度後期から2015年度前期まで「授業・教員への評価」の項目のみを用いてきた。そこで、質問項目の見直しを行い、2016年度からはティーチングからラーニングの評価にシフトさせた。学生自身の主体的な学び(1〜3)や理解の側面(13、16)を追加し、「この授業におけるあなたの学習や感想として、あなたの考えを5段階で示してください。」として、授業評価アンケートを授業の振り返りの機会とした(「表2」の授業評価アンケートの質問項目)。そのため、この授業評価アンケートの結果は、当該科目における学生自身の主体的な学びや理解の側面についての自己評価を示すことになる。

次に、授業評価アンケートから得た各項目の学生の回答と、各教員のシラバス調査から得た各ALのタイプのデータを統合し、ALの教育効果を測定した。その結果が「表2」である。色の付いた項目は相関があることを示しているが、ALをより多く含む科目の方が、学生は主体的に取り組み

授業評価アンケートの質問項目		能動的授業	合計	知識の定着・確認志向	表現志向	応用志向	知識の活用・創造志向
主体性	1 授業に積極的に参加した		.289**	.086*	.221**	.160**	.274**
	2 授業内容が興味深く、さらに学ぼうと思った		.228**	0.03	.188**	.133**	.237**
	3 問題(レポート、テスト、作品等)をより良いものにしようと努力した		.262**	0.047	.256**	.121**	.245**
学修状況	4 授業は質問や意見などを発言しやすい雰囲気であった		.308**	0.082	.235**	.210**	.258**
	5 授業は体系的に構成されており、理解しやすかった		.138**	0.076	0.064	0.07	.146**
	6 スライドや板書、配布資料等は整理されており、理解しやすかった		.108**	0.073	0.015	0.06	.136**
	7 学生の理解度を確認しながら授業が行われた		.212**	.132**	.130**	.122**	.150**
シラバス	8 教員の熱意が感じられた		.196**	0.006	.152**	.135**	.215**
	9 シラバスにある科目の達成目標は明確であった		.186**	.085*	.106*	.096*	.194**
	10 シラバスにある成績評価の方法は明確であった		.157**	0.078	.090*	0.076	.161**
満足度	11 授業の受講にあたってシラバスの記述は参考になった		.165**	0.047	.109**	.093*	.179**
	12 総合的に判断して、この授業に満足した		.205**	0.056	.153**	.111**	.208**
理解度	13 授業内容について説明できる		.257**	0.05	.209**	.155**	.247**
	14 授業内容について他の科目の学習内容など、本授業以外との関連性を考えることができる		.241**	0.075	.192**	.131**	.218**
	15 授業で学習したことを本授業以外においても応用することができる		.286**	0.077	.238**	.158**	.257**
	16 この授業の理解度を的確に判断する自己評価能力が身に付いている		.265**	0.064	.202**	.162**	.253**

相関係数 $|r| = 0.2 \sim 0.4$ 弱い相関あり 検定 $*: p < 0.5, **: p < 0.1$

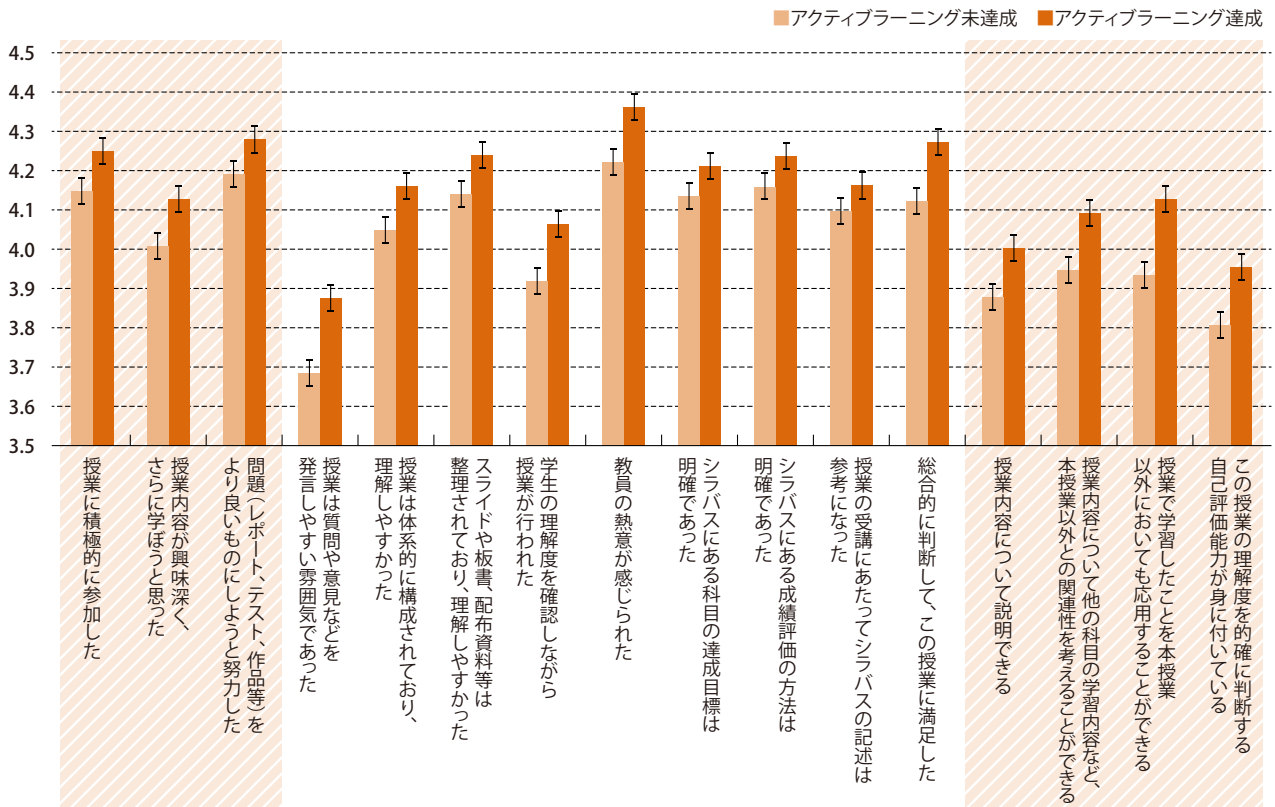
[表2] 個々の科目での授業評価アンケートの平均値とALタイプとの相関(2016年度調査)

た、理解できたと答えている。また、「表現志向」「知識の活用・創造志向」タイプのALをより多く導入している科目は、主体性と理解の評価が高く、「知識の定着・確認志向」タイプでは評価は低いと考えられる。

なお、ALの導入の割合が高いほど「質問や意見などを発言しやすい雰囲気」となっており、満足度も高くなっていることも示されている。

本学におけるAL(科目)としての定義「2つ以上を授業中に実施し、かつ各タイプに相応した方法の実施頻度合計4ポイント以上」を達成した授業科目(群)と、未達成の授業科目(群)の、授業評価アンケート項目の平均を示したものが「図1」となっている。

学生は、ALの導入割合が4ポイント以上の科目の方が、4ポイント未満の科目よりも、授業評価アンケートの全ての項目において高く評価していることが明らかとなった。なお、クラスの大きさと積極的に参加するかどうかや、クラスの大きさと満足度の相関関係も分析したが、関係がないという結果も得ている。



【図1】能動的授業定義の達成・未達成と授業評価アンケート項目の平均の差(2016年度調査)

3 教学IRに連動した授業デザイン

本ワークショップは、学生の深い学びに結び付く授業デザインを考えてもらうためにプログラムを編成した。

まず、アイスブレーキングにおいて受講者自身が過去に大学等で受けた授業の振り返りを行い、「良い授業」を考えるきっかけとした。次に、ワークIにおいて

前述した学生の主体的な学びや理解の促進に教授方法が関係していることを表すデータを示し、チームに分かれて「大学教育の学び」について考えるディスカッションを行った。このワークではさまざまな分野の教員と話し合う中で、良い授業とは何

開始時間	トピック	内容
10:00	オープニング	開会の挨拶、オリエンテーション
10:10	アイスブレーキング	
10:30	ワークI	「大学における良い授業って何だろう??」 学生の授業評価アンケートから授業デザインを考える
12:00	意見交換会	実践を語る(自分自身の実践を人に伝えてみよう!)
13:00	ワークII	「どうやって伝える?」授業で使うツールを検討する
15:00	休憩	
15:10	ワークIII	「チームでシラバスを作ってみよう!」シラバス作成 ワーク
16:30	クロージング	

〔表3〕授業デザインワークショッププログラム

かを深く考えるときともに、データに基づいて授業をデザインすることの重要性に気付いてもらうことを意図している。

ワークIIでは、学修目標を達成するための具体的な教授方法や、それに必要な評価方法についてもチームで話し合ってもらった。最後のワークIIIでは、どのような教授方法をいつ配置するかを検討しながら各自でシラバスを作成した。〔表3〕

このように、どのような教授法が「深い学び」に効果的かを理解し、一人一人が実際に行っている授業科目を題材として授業デザインを考えることによって、より実際に活用できるスキルを身に付けることができると考えられる。

4 授業改善と深い学びの好循環

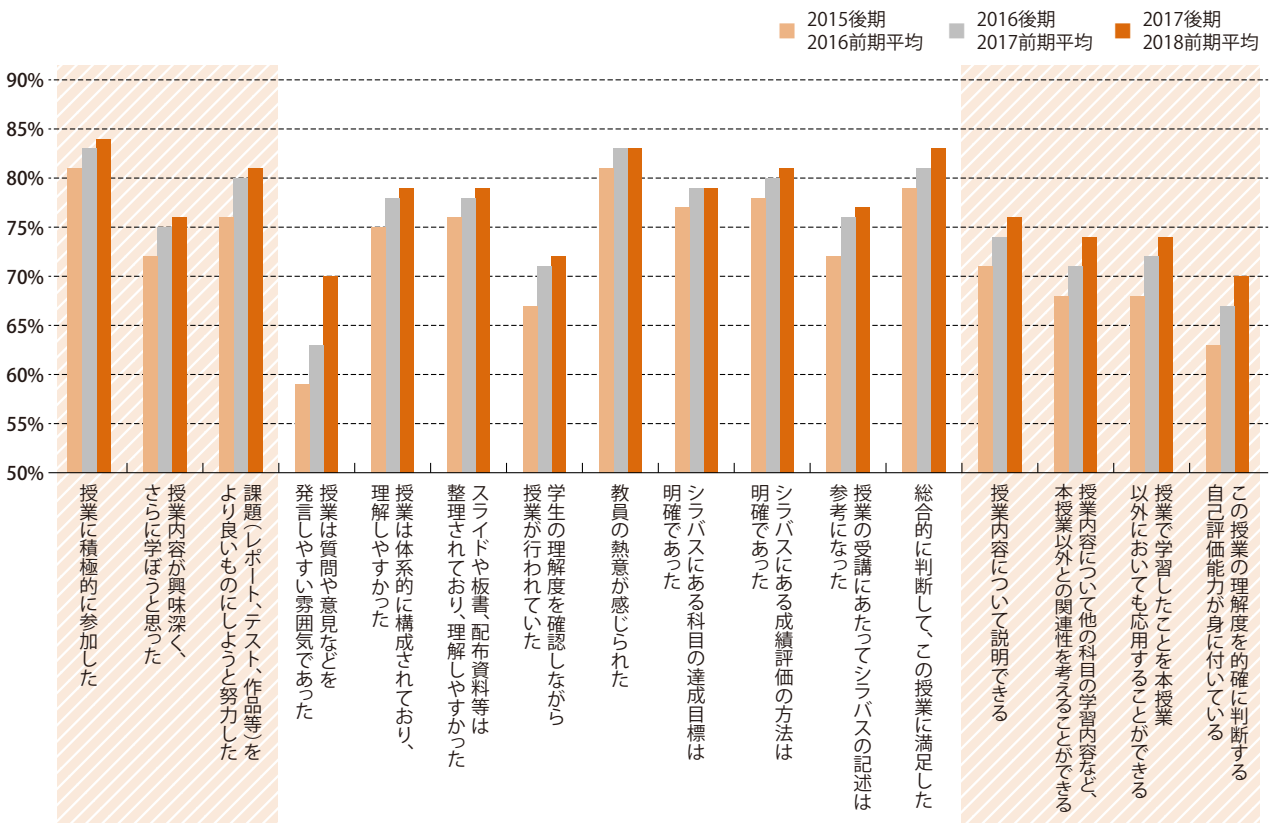
本学では、教授方法と授業評価アンケートの分析結果を、こうした授業デザインワークショップで提供するだけでなく、教学IRデータとして全学会議を通じて学部へとフィードバックしている。その結果、ALの導入度合いが4ポイントに達する科目の割合は、2015年度43%↓2016年度49%↓2017年度51%と年々増加してきた。また〔図2〕に示されるように、学生の授業評価アンケートの主体性と理解

に関わる項目についても、2015年度↓2016年度↓2017年度になるに従って、その数値は高くなってきている。以上のことから、学生の主体性と理解の自己評価がAL科目で高いことを学部にフィードバックすることでALの実施率が高まり、その結果として学生の主体性と理解の自己評価がさらに高まっていくという、良好な循環が生み出されていると考えられる。

5 まとめと今後の展望

教学IR連動型FDの実施により、学生の主体的な学びや理解について教員と議論することが可能になり、教授方法の改善が重要であることを示し、その改善状況も把握できるといった。

しかしながら、2020年度はコロナ禍により、対面の授業が困難な状況に置かれた。授業の多くはオンライン(同期型・非同期型)となり、教授方法は大幅に変更せざるを得ない状況となっている。今後はオンラインのためのALの方法の開発や情報共有が重要と考える。これまで以上に、教学IRを活用して「学び」が深まる授業の提案をしたいと考えている。



[図2] 授業評価アンケートの経時変化

「学生目線」を

授業改善の資源に

新原 将義

帝京大学高等教育開発センター 講師

1 はじめにー「学生目線」とは何か

「学生目線での授業改善を」という文言を目にして驚く大学教員は、もはやいないだろう。そう思えるくらい、FDの義務化やアクティブラーニングの大流行を経て、授業改善の必要性は広く認知されるようになったし、その中で学生の視点に立つことや、学生に寄り添うことといった、「学生中心主義」の言説は繰り返し強調されてきた。

大学教育論を概観すると、「学生中心主義」が含む考え方は3つに大別できる。1つ目は、いわゆる「学習者中心の授業デザイン」という考え方に見られるような、

授業を通して「何を教えるのか」ではなく「学生が何を得るのか」を重視すべきという考え方である。2つ目は、学生が大学に求めているのは何かというニーズを把握し応えるべきであるという考え方である。

しかし、「学生中心主義」の3つ目の考え方、つまり「そもそも学生が何を求めているのか」を知る、という観点は、前述の2つの考え方と比べると、これまであまり重視されてこなかったと言っていだろうか。授業評価アンケートをはじめ、この観点を活用するための取り組みは行われてはきたものの、そのほとんどがアンケートによるものに限られており、それ以上に踏み込んだ情報収集を試みた取り組みは一般的にはなっていない。

授業の中で学生が見ているものや感じていることを、授業者である教員が把握することは、とても難しい。まず授業中の教員は、教室が広くなればなるほど、教室全体や学生個々人の様子に目を配り難くなる。また授業評価アンケート以上に踏み込んだ学生の本音を知りたいと思えば、インタビューを行ったとしても、そこには学業成績を評価する者と評価される者という権力構造が不可避に発生するため、教員が知らなければならぬはずの

ネガティブな要素はなかなか可視化されないだろう。

本稿で紹介する帝京大学の取り組み「SCOT」は、こうした授業者がなかなか知ることのできない、「学生が何を求めているのか」を授業改善の資源とする試みである。以下では、この取り組みの概要と現状、今後の展望について簡単に報告する。

2 SCOTの概要

SCOTは、正式名称を「Students Consulting on Teaching(学生による授業コンサルティング)」という。アメリカのブリガム・ヤング大学やユタバレー大学での取り組みを参考に、本学では2011年度に導入され、2021年度には11年目を迎える。

コンサルティングというと、課題の具体的な解決策やノウハウを教授することを目的としたコンサルティングが想起されやすい。しかしSCOTが目指すのは、相談者が課題の解決策に自ら気付くことを支援するという「プロセス・コンサルティング」である。そのため、SCOTは直接的に授業の内容について評価をしたり改善策を

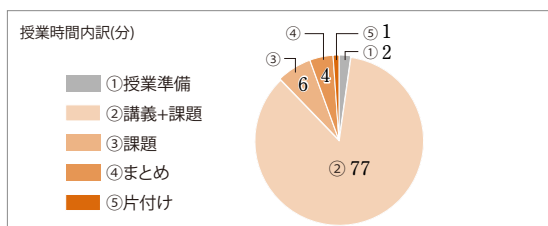
提示したりすることを目的にはせず、あくまでも相談者である授業者自身が授業改善の方針を見いだすのを支援することを目的としている。

SCOTのコンサルティングは、大きく3つの段階を踏む。まず第1段階では、授業観察の事前準備として教員とSCOTとして任命された学生が面談を実施し、どのような点についての情報を収集したいのかについて話し合いを行う。事前面談を経て、第2段階ではSCOTが受講生に紛れて授業に参入し、情報収集を行う。この際、より普段の授業に近い様子を観察できるよう、SCOTは受講生の「ふり」をして、授業観察を行っていることが他の受講生に伝わらないよう配慮する。第3段階では、この授業観察によって得た情報を「授業観察レポート」としてまとめ、教員に提供する。この際、教員の要望によつては事後面談を行うこともあるが、SCOTのコンサルティングは授業観察レポートによる情報提供を核として組み立てられている。

「図1」は、実際にSCOTが作成した授業観察レポートの一部である。SCOTが授業内容についての評価を行わないという活動の方針によつて、授業観察レ

ポर्टに記述される情報は、授業中の学生・教員それぞれの行動面の記述が中心となっている。

■ 授業の時間内訳



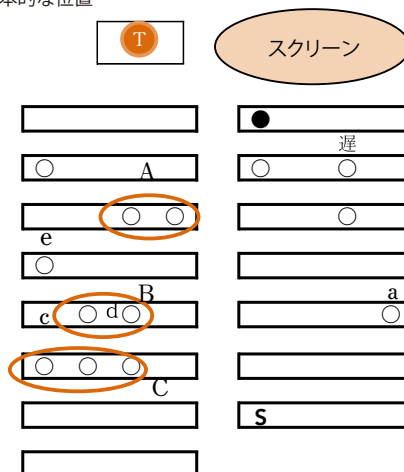
■ グラフの説明

- 授業準備**
この時間は授業準備を行っていた時間です。先生はスライドの準備等を行っていました。学生は授業が始まるまで、休憩時間の延長のように過ごしていました。
- 講義+課題**
この時間は先生の説明を聞きながら学生が課題を行っている時間です。先生はスライド上にリアルタイムで赤ペンを使って丸を書きこんだりして説明していました。学生は、授業内容についてスライドを見ながら、あるいは友人と教えあいながら取り組んでいました。しかし、授業に関係ないHPを開いている学生やスマートフォンを操作している学生も見られました。
- 課題**
この時間は、学生が課題に取り組んでいる時間です。学生は授業内容について検索したり、教えあいながら課題に取り組んでいました。先生は説明をやめ、教室を周回していました。スマートフォンを操作している学生も見られました。
- まとめ**
この時間は、先生が次回までの演習について説明している時間です。先生は次回までの演習の取り組み方について説明していました。学生は、授業内に取り組む人や帰りの準備を行っている人も見受けられました。スマートフォンを操作している学生も見受けられました。
- 片付け**
この時間は片付けを行っていた時間です。先生は、退室にむけて片付けを行っていました。学生は各自退室していました。

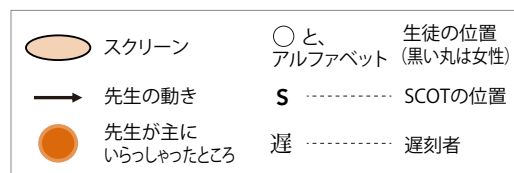
[図1]授業観察レポートの例

■ 先生の動き

① 基本的な位置



パソコンを操作しながら説明されていたので、質問の時間以外は先生用のパソコンのところにいらっしゃいました。



現在、本学におけるSCOTの活動は活発に行われているとは言いがたい状況である。教員向けの周知の難しさなど、考えられる原因はいくつかあるが、そのうちの一つに、SCOTがその機能を発揮できる授業が限定されていることが挙げられる。受講生に授業観察であることが知られないようにするという活動方針によって、SCOTが授業観察を行える授業は、ある程度受講生が多い、講義型の授業に限定されてしまう。そもそもSCOTの活動は、対面授業を前提としていた。そのため、コロナ禍以降急増したオンライン授業には、授業観察レポートによる情報提供を要としたSCOTの活動は対応できない。

3 SCOTの現状と今後の展望

SCOTの活動を維持するためには、常にSCOTとして活動できる学生スタッフを養成し続けることが必要となる。本学では、随時学生向けにSCOT募集の周知を行い、希望者に対する面接会や研修会を実施している。2021年4月の時点で、6名の学生がSCOTとして登録されている。

こうした現状を改善するため、2021年度以降、SCOTは活動の枠組みを拡張することを計画している。具体的には、オンライン授業に対応できるよう、従来の授業観察だけでなく、受講生を対象としたアンケートやグループインタビューによる情報収集を新たな業務として取り入れる。

大学改革を取り巻く状況は急速に変化してきた。さらにコロナ禍は、対面授業が前提だという、われわれの多くが疑わなかった既成概念を打ち壊した。このような大きな変化の中で、今後のSCOTの新たな業務をどのように大学全体に普及させるのか、今後もしっかり考えていきたい。

学生委員による

学生提案科目の実施

岩崎 千晶

関西大学教育推進部准教授

1 学生提案科目の概要

大学の授業をより良くするための手段の一つとして、授業評価アンケートがある。学生からの授業の感想や意見を基にして、教員は授業をより良くしていく。この授業アンケートに対して、文部科学省(2021年)[※]は学生に加えて、授業を支えるTA(ティーチング・アシスタント)といった学生スタッフの声も取り入れることを推奨している。授業を支える立場からの意見を取り入れることで、複眼的に授業を分析し、より良い方向性を見いだすことが期待されていると言えよう。これらはいずれも教員が設計した授業に対して、授業を受ける立場、支える立場からの意見を提示

することで、授業をより良くしていくという有益な取り組みであると言える。

さらに関西大学では評価をする側、される側といった立場を乗り越え、教員と学生が共に、学生にとって必要な学びを育める授業はどのようなものであるかを考え、実際に授業科目を提案し、授業設計をし、実施するという取り組みを行っている。それが、学生提案科目である。従来の授業は、教える側が学生に育んでほしい力を明示し、それを育成するための方法を選択し、評価していく。学生提案科目では、学生が育みたいと考える力、今の自分たちに足りない力を明らかにし、その力を育むことができる授業を作り上げていく点が大きく異なる。従来の授業にはなかった授業目標を設定する時から、学生の声を反映し、学生のニーズに対応した科目である。学生と共に授業を作り上げていくという、授業をより良くするための新しい取り組みの一つと言えるのではないかと考える。

本稿では、学生による科目提案委員会の取り組みの概要、効果と課題、配慮すべき点について述べる。本学では、2011年4月より学生による科目提案を実施する運びとなった。学生が自分たちで学習内容を考え、新たな科目

を開設することは、学習者の学習動機を高めることや、大学での自らの学びを振り返ることにつながるという期待があった。そこで、共通教養教育委員会の下部組織として、学生、教育推進部教員・共通教養教育委員（授業コーディネーター）、職員委員を構成員とした学生提案科目委員会を立ち上げた。あくまでも活動の主体は学生としており、学生の活動を授業コーディネーター（1名）と職員委員（1名）が支援しながら運営していく。その他の委員は、学生が考えた授業案の発表を行う場でコメントなどをする。

2010年に科目提案に関心を持つ学生に向けた募集を始め、16名の学生が集まった。彼らを2グループに分け、2科目を提案することとなった。しかし、学生はこれまで授業を作った経験がないため、教育推進部の教員が授業設計の基本について話したり、学生の話し合いを支援したりした。また共通教養科目を担当する職員も、学生たちの活動を支援する役割として活動に参加した。その後、現在までに「恋する学問」「それいけ関大生！」等の10科目が新規に開設された。

2 学生提案科目「プロフェッショナルのまなざし」 「マナビをマナブ。」の実施

ここでは初年度の学生提案科目「プロフェッショナルのまなざし」マナビをマナブ。」の概要について述べる。本科目は「防災」や「高齢化社会」などいくつかの学際的なトピックに関して、12学部、教育推進部・国際部から教員が一人ずつ講義をするという、これまでにない授業であった。例えば「防災」であれば、社会安全学部の教員が防災の現状や課題を、システム理工学部の教員が建築材料の強度を、社会学部の教員が災害時のメディアの役割を、それぞれの専門的視座から論じた。

授業目標は、①各学部の専門分野に関する講義を聴くことで「プロフェッショナル」な視座を学び、それが学際的なトピックにどう関連しているのかを知ること、「物事を多角的に捉える力」を培うこと、②多角的なものの考え方を理解した上で、学生がトピックに対して「自分なりの意見」を持ち、受け身ではなく能動的に物事について考える力を育成することであった。

目標設定に当たり、学生たちは、まず自分たちに足りな

いものは何かを考えることからスタートした。その結果、現在の大学生は、人の意見に同調したり、流されたりする人が多く、さまざまな人の意見を聞いた上で「自分の考え」を持って行動する力が必要であるという結論に至った。そこで、学生にとって身近な現代社会における問題を取り上げ「物事を多角的に捉える力」を培うこと、また各専門を持った教員によるものの見方や考え方、解決策を学ぶことによつて、多角的なものの考え方を理解した上で、能動的に物事について考え、自分なりの意見が言えることを目指すこととなった(岩崎2011年)^{※2}。このように、学生は今の大学生に足りないものをクリティカルに捉え、それを育むために本科目を作り上げた。なお、学生の意見を基に、授業コーディネーターのサポートを得て作り上げた新たな授業、新たな試みを多くの教職員に知ってもらうために、本科目を公開科目とした。(本科目の内容は下記参照)

3 学生提案科目の効果と課題

授業後、本科目を受講した学生向けにアンケート(自由記述形式)を実施した。以下に自由記述の結果を示す。

学生提案科目「プロフェッショナルのまなざし～マナビをマナブ。～」

第1回 「ガイダンス」 岩崎千晶(教育推進部)

【高齢化社会との付き合い方】

第2回 「少子化を克服できない日本」 白石真澄(政策創造学部)

第3回 「笑い与健康」 森下伸也(人間健康学部)

第4回 「まちづくりと高齢化社会」 木下光(環境都市工学部)

第5回 「人工臓器と再生医療」 平野義明(化学生命工学部)

第6回 「新しい価値を創造するビジネスプラン」 川上智子(商学部)

【日常に潜む災害との付き合い方】

第7回 「防災・減災を支える建築材料」 齋藤賢一(システム理工学部)

第8回 「日本における防災・減災」 河田恵昭(社会安全学部)

①首都壊滅(首都直下地震と洪水・高潮との複合災害)

②大阪の災害(地震・洪水・高潮・津波)

③最近の集中豪雨災害・ゲリラ豪雨災害

④旅先で災害に遭わないために

※初回に、①～④のテーマでアンケートをとり、
最多数のテーマの講義を行う。

第9回 「災害時におけるラジオ放送～阪神大震災時に流れた音楽を中心に」 小川博司(社会学部)

【多様性との付き合い方】

第10回 「多文化社会日本で政治を学ぶ意味」 大津留智恵子(法学部)

第11回 「東南アジアの歩き方」 澤山利広(国際部)

第12回 「公共部門の役割」 林宏昭(経済学部)

第13回 「実践知性としての英文学研究」 宇佐見太市(外国語学部)

第14回 「高松塚・キトラ古墳の壁画世界」 米田文孝(文学部)

第15回 「まとめ・講評」 岩崎千晶(教育推進部)

まず「授業で身に付いた力」に関しては、「ある物事に対して、多角的視点で考える力を持ったり、自分以外の他の人の意見を聞き、応答ができた」と、『考える力』が身に付いた。それは、専攻している商学的知識以外の、他学部の教育内容を少しながら学習できたからだと思う」、「さまざまな学部の先生方の講義を受けて、一つの社会問題でも多角的な意見があることを考えるようになったと思いません」など、多角的に物事を捉える力が育成されたとの意見が寄せられた。一つの社会問題に対して、各学部の教員がそれぞれ課題を提示したことは、社会問題の多様性を実感する良い機会となったことがうかがえた。

また、「社会問題をリアルに認識する力が付いた」、「授業で取り上げられているトピックは実生活に結び付いているものが多いため、自分なりの意見・考えを持って授業に参加することができるようになった」など、社会問題を読み解く力や自分なりの考えを持てるようになったことが見受けられた。授業で取り上げた課題は震災など学生にとって身近なトピックであったため、学生は向き合うべき課題に対して自らの意見を表明することの必要性を感じていた様子が示された。

他にも、「毎回異なるテーマを扱うこともあったからか、集中して聴く力が身に付いたと感じています」、「諸問題に対する具体的な意見の作成力など『聴く力』と『書く力』が育成された」と考える学生もいた。毎回の授業でショーレポート課題が実施されたため、学生は書くことについて習慣づき、それが聴く力や書く力の育成につながったと考えられた。

「授業の良かった点」に関しては、「他学部の教員の授業を聞くことができた」という意見が挙げられた。「専門分野の異なる教員によるリレー講義という形式なのに、前後の授業がつながっていたので聞きやすかったことです。また、社会で起きている問題を取り上げているため、学部問わず関心を持つことができる内容だったことが良かったです」、「さまざまな学部の先生の話聞けるので、普段自分の学部にいるだけでは分からないことが分かる」など、所属学部ではない教員の話聞くことでより大きな視野で社会問題を捉えることに、この講義の良さを感じる学生がいることが明らかとなった。学生委員が設定した到達目標の達成に、一定の効果が見受けられた。

「授業の改善点」では、「毎授業で何人かのグループプー

クと発表を設けると、より学生の関心興味が刺激されるのではないかと思う」といった、学生同士での意見交換の機会をより増やすことを希望する意見が寄せられた。本科目では、考え、自分なりの意見を言うことを目指していたため、授業中や授業後のLMS(学習管理システム)にて意見交換の場を設けていたが、さらに対面での意見交換やLMSでの議論の場を増やすことを希望する学生もおり、双方向での場の生成を学生が求めていることが示された。

4 学生提案科目において配慮すべき点

最後に、今後こうした授業を普及させていくために配慮すべき点について述べる。なお、これらの意見は、授業コーディネーターとしての経験、ならびに学生科目提案終了後の振り返り会にて担当教員から寄せられた声を基にしている。

まずは「授業コーディネーター、職員の支援と確保」である。学生だけでは授業設計をすることは困難であるため、授業コーディネーター、職員とともに学生をサポートする体制作りが必要になる。授業設計をするに当たり

学生とのミーティングは10回を超え、メールのやり取りも多数ある。また、授業担当を教員に依頼する際の同行、事前の打ち合わせ、事後の振り返りの実施が必要となる。授業以外の活動の支援にも従事できる教職員を確保し、取り組みを複数の人数で支える体制を作ることが望ましいだろう。

次に、「TAの確保」である。担当教員は学外講師や他キャンパスに所属する教員もいたため、教室のICT設備の活用や、多人数講義の資料配付、レポート提示などをスムーズに行えるよう、授業を補助するTAも必要になる。

最後に、「学生提案科目の継続性」である。学生提案科目は2年間実施できるが、2年目は科目を提案した学生委員が卒業している場合もある。そのため、2年目は学生委員がいない状態で、授業コーディネーターが、教員へ講義依頼、事前打ち合わせ、事後報告会としての振り返りを行うといった現状もある。また授業内容の変更や教育上の意義の確認についても、教員だけで実施する可能性もあり得る。授業開設だけではなく、授業の評価を行い、科目の改編や継続についても十分に議論できる体制を構築する必要があると考える。

現在、授業アンケートの結果を組織的に検討し、その内容を反映する機会を設けている大学は67・9%となっている。その一方で、学生が企画する授業科目を開設している大学は3%に満たない(文部科学省2021年)^{※1}。授業をより良くするための学生による授業参画の効果は大きいと考えるが、そのためには学生による授業設計プロセスの支援体制が欠かせない。現行では学生による科目提案の実施数が限られているため、今後、大学が支援体制を整え、学生たちによる科目提案の取り組みが増えることを期待する。

※1 文部科学省(2021年)「教育と研究を両輪とする

高等教育の在り方について

「教育研究機能の高度化を支える教職員と組織マネジメント」

https://www.mext.go.jp/content/20210302-koutou01-1411360_00002_003.pdf

(情報閲覧日2021年2月28日)

※2 岩崎千晶(2011年)「学生提案科目の開講とその公開

https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/topics/post_2.html

(情報閲覧日2021年2月28日)